

多民族・多言語・多宗教が 共存する平和な社会

山本博之

日本に一番近いイスラム教の国

憲法でイスラム教を国の宗教に定めているマレーシアは、日本に一番近いイスラム教の国です。イスラム教を国の柱に掲げながら経済発展を遂げている国としても注目されています。ただし、イスラム教徒は国民の半数に過ぎません。街を歩いてみれば、マレーシアが多民族社会であるとすぐにわかります。ローマ字、アラビア文字、漢字、タミル文字の看板が並び、さまざまな民族衣装を身につけた人々が暮らしています。

マレーシアの主要民族はマレー人、華人(中国系)、インド人です。マレー人はイスラム教徒なので、この国はイスラム、中華、インドの「文明の交わりの場」だといえます。この3つが完全には混じり合うことなくマレーシア社会を織り成しています。過去に民族間の緊張が高まったこともありますが、その経験をもとに、2007年に独立50周年を迎えたマレーシアは多民族・多言語・多宗教が共存する平和な社会を作り上げてきました。

人々の暮らしは多彩で色鮮やか

人口の5割強を占めるマレー人はイスラム教徒で、マレー語を話します。建国の過程で先住民としての意識を発展させ、今では多くの分野でマレーシアの主流を占めています。イスラム教徒であることに誇りをもち、多くのマレー人男性は金曜日にモスクに集まって行う礼拝を欠かしません。豚肉はもちろん、

それ以外にもイスラム教で定めたやり方にしがわらない調理方法の食事もタブーです。

ただし、中東のイスラム教徒の生活様式をそのまま真似しているわけではありません。例えば、露出の少ない服装をすることは同じでも、マレー人女性は顔まで覆い隠すことはほとんどなく、着ている服装も黒一色ではなく実にファッショナブルです。

華人とインド人は、イギリス植民地時代に主にスズ鉱山やゴム農園の労働者としてこの地に渡ってきた人々の子孫です。華人は人口の約4分の1を占め、多くが仏教徒です。祖先の出身地によって福建、広東、客家、潮州、海南などに分かれ、家庭では主に福建語や広東語などを話します。インド人(人口の1割弱)は、ほとんどが南インド出身のタミル人でヒンドゥ教徒ですが、ほかにイスラム教徒、シク教徒、キリスト教徒もいます。

それぞれの民族語、国語であるマレー語(マレーシア語)、そして植民地時代の公用語で国際社会の共通語でもある英語と、多くのマレーシア人にとって3つも4つも言葉が話せるのは当たり前のことなのです。

華人やインド人は祖先の出身地の文化や伝統をマレーシアにもち込みました。その一部は地元風アレンジされ、例えば食べ物では各種料理がさまざまな屋台料理となって道端の屋台に並べられています。その一方で、お祭りのように祖先の出身地で失われつつある伝統を、オリジナルに近い形で維持しているものもあります。外の世界とつながりをもつ人々が集まることで、マレーシアの暮らしは多彩で色鮮やかなものになっています。

外の世界とのつながりを維持するといっても、決してマレーシアに愛着がないわけではありません。むしろ逆です。マレーシアで生まれ育ち、その生活環境になじんだ彼らにとって、い

まさら祖先の故郷で暮らせというのは無理な話です。そんな彼らが自分らしさを最もよく発揮できるのは、「故郷」とのつながりを維持しつつ、それを利用して居留先であるマレーシアを文化的にも経済的にも豊かにすることです。マレーシアの華人は華僑と呼ばれることを嫌います。「僑」は「仮住まい」を意味するためで、華僑でも中国人でもなく華人なのだといいます。これは、自分たちはマレーシアで生きていくという思いの表れにほかなりません。



マレーシア社会の模索は続く

マレー人の側でも華人やインド人を国民の一員として受け入れています。マレー語で「バンサ」とは「民族」の意味ですが、マレーシアでこの言葉は通常の民族とやや異なる意味で使われています。バンサとして認められると全国規模の民族政党をもつことができ、国会と政府を通じて民族の権利を守ることができます。マレーシアのバンサはマレー人、華人、インド人の3つで、先住民であるマレー人の特権を認めた上で、華人やインド人も民族の独自性を維持し、発展させることが認められているのです。

バンサ扱いされていない民族もいます。1963年にマレーシアの一員となったボルネオ島のサバ州とサラワク州の先住民族です。サバにはカダザン(ドゥスン)人やバジャウ人、サラワクにはイバン人など、それぞれ独自の信仰を守り、独自の言葉を話す数十の先住民族が暮らしています。

マレー人の権利を守るべきとの声がある一方で、華人やインド人は何世代たてばマレー人と対等に扱われるのか、また、サバとサラワクの先住民族はいつになればバンサの地位が得られるのかという声も聞こえてきます。民族の区別なくマレーシア国民全体を1つのバンサにしてはどうかとの声もありますが、

それでは文化的独自性が失われるのではと心配する声もあります。多様性を維持した上で誰もが納得する公正さをどう実現するか、多民族社会マレーシアの模索はまだまだ続きそうです。



マレーシア・ボレ!

多様な人々の間でマレーシアとしてのまとまりはどのように生まれるのか。その答えの1つは、「マレーシア・ボレ!」(マレーシアはできる!)のスローガンです。国旗ポール(世界1位)、ツインタワー(完成時世界1位)、KLタワー(世界4位)など、クアラルンプールには世界有数の高い建造物がいくつもあります。また、マレーシア人はヨットでの世界一周、エベレスト登頂、徒歩での北極点到達などの冒険にも挑戦し、最近では宇宙飛行も計画中です。外の世界を常に意識しているマレーシアの人々は、他の国にできることなら自分たちにもできるはずだとさまざまなことに挑戦し、マレーシア人であることに誇りをもてるよう努力しています。

マレーシア社会のまとまりを支えるもう1つは、言葉そのものです。いくつもの言葉が話せるマレーシアの人々は、会話に相手の言葉を織り交ぜることで相手への敬意を表す習慣を育ててきました。日本人を相手に話していると、英語やマレー語で話していてもときどき日本語の単語を挟んできます。話し相手の言葉を取り込み、会話がいろいろな言葉のごちゃ混ぜになっていく、それがマレーシア流のもてなしなのです。観光やビジネスでマレーシアを訪れるなら英語だけでも十分間に合うでしょうが、一步踏み込んで親しくなるためにも、ぜひマレー語を学んでみてください。

(やまもと・ひろゆき 京都大学地域研究統合情報センター助教授)

